

多くを尋ねるものは多くを学ぶ（平成28年度研究紀要巻頭言より）

高校時代、待ち遠しく思う授業がいくつかあった。まずは、数学。I先生はとにかく引き出しが多く、どんな質問にも答えてくれた。数学が紡ぎだす世界は、矛盾のない精巧に組み立てられた美しいものであることを教えてくれた。まだ見ぬその先にとても憧れた。

そして、現代国語は詩歌の授業。とにかくいろいろな解釈が飛び交う授業で、あつけにとられたことは一度や二度ではない。作者はそこまで考えていたのだろうか。それらしいことはどこにも書いてない。一人取り残されたように思ったことが多々あった。例えば、この俳句だ。

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり（飯田蛇笏）

この句はすごく印象に残っている。秋になったのに片付けることを忘れられた風鈴が、折からの秋風に吹かれて、ちりりんとうびしげに鳴った。風鈴の澄み切った響きは、やがて私の心にも静かに染み渡ってきたことだ。ということで、寂寥感や季節の移ろいと同時に、作者自身の人生の移ろいをも詠ったものである。読了後、読者はほのかな余韻に浸ることができるだろう。と、先生は教えてくれる。でも、ということで、生徒の感想をいくつか紹介してくれた。その一つに衝撃を受けた。まさに、コペルニクス的転回。あのときの衝撃を思い起こしながら紹介する。

S君はこう断言する。この句は作者がついに何かに目覚めたときのことを詠ったものだ。作者の本気を高らかに宣言したものといってよい。実際、くろがねとは鉄のことだ。くろがねは困難を打ち砕きつつ、道を切り開いていく強固な意志を象徴しているのだ。今になって愚かな自分によく気付いた。もっと早く志に向かって努力すべきところだった。機は熟した。今こそ動くとき。そして彼は力強い一步を踏み出すのである。「先生、これは悩みに悩んでいた青年がついにその世紀末的状况から脱却し、進むべき道を見つけ、まさに一步踏み出した瞬間を詠ったものです。」

聞いていて気持ちよかった。どんどん引きずり込まれる。一つのことをこんなにも真剣に考えられるものなのかと耳を疑った。僕は、こんな瞬間を待ち望んでいたのかもしれない。心地よい。S君はほんとうによく考えている。

理想とする「学び」に出会った瞬間だったと思う。そして、自分の勉強を一から考え直してみようと思った。とにかく変えなきゃと思った。S君が気づかせてくれたことに、何としてでも応えようと思ったのかもしれない。

学びに向かうエネルギー、それは主体性である。しかし、主体性は教えられるものではなく、内側から湧き上がるもの、学びの必要性を本人の心の中に生じさせなければならない。そのためには、子ども達に学びの楽しさを経験させることが第一である。それは先生方自身が学生の頃に学びの中で得た感動を子ども達に伝えることと言い換えてもよい。その上で、「なぜ、その科目を学ぶのか。何の役に立つのか。得られる能力・力とはどんなもので、どこでどのように役に立っているのか。という問いに答えてあげることが必要であろう。しかも、先生方自身の言葉で。そうして、学ぶことと将来が直結していること、学びが社会と直接にリンクしていることを自覚させることが最初の目標です。そうすることで、子ども達は学問の本質に近づいていくと考えます。

学問の語源は、「学もってこれを聚(あつ)め、問もってこれを辯ず」(易経)である。学問とは、「学びによって知恵を集め、問うことにより疑いを明らかにする」ということだ。これゆえに、真の学びが始まると疑問が生まれる。自問して、そして、質して明らかにする。こうして、本県が掲げる「問いを発する子ども」に近づくのである。その先にあるのは、「多くを尋ねるものは多くを学ぶ」という最終目標である。

生徒に主体性、では先生には何か。それは、情熱と専門性である。これさえあれば授業は自ずと豊かになっていくものです。先生方にはかつて自分が経験した驚きや感動を授業をはじめとする教育のあらゆる場面で情熱を持って生徒に伝えてほしい。同時に、自分の専門性をとことん追究し、高い専門性を持ったプロとして生徒の力を伸ばしてほしい。

本紀要は、本高のこの一年の活動や研究成果をまとめたものである。小冊子ではあるが、今年度の学力向上を目指した授業改善の証として見て頂きたい。その上でさらに、次年度の研究の推進力、あるいは、教師力を高めるヒントを読み取って頂けるならばうれしい限りです。

(終わり)